



ウスビ・サコ

Oussouby SACKO

京都精華大学学長

マリ出身。北京語言大学、南京東南大学などを経て、京都大学大学院工学研究科建築学専攻博士課程修了（工学博士）。2018年4月より京都精華大学学長に就任。専攻は空間人類学で、国や地域によって異なる環境やコミュニティと空間の関係を研究。くらしの身近な視点から、多様な価値観を認め合う社会の在り方を提唱している。



畑 忠男

Tadao Hata

京都生協理事長

1985年京都生協に入協。
2015年より理事長に就任。



畑 サコさんが考える国際化とは、どのようなことでしょうか。

サコ 同質化ではなく、日本を見せることが国際化だと思います。グローバル化で重要なのは、流されないことです。差異がある中で共存し、違いを認め合っていくことが大切です。日本には、外国人に合わせた表面的な日本を見せようとする姿勢があるように思いますが、日本に来る外国人は恐らく、日本の精神の根底を知りたいのです。例えば「なぜサッカーのワールドカップの試合の後に、清掃するのか」。そのような日本人の精神に憧れているのだと思います。

畑 私たちはそういった日本人の良さを失いかけているのかもしれないですね。

国際社会の一員として 一人ひとりに求められるもの

畑 京都精華大学の構想の1つに「グローバル化」がありますが、京都生協も国際社会の一員としてSDGsを意識しています。例えばエシカルな商品を扱い、生産現場の情報提供を通じて「誰かの笑顔につながるお買い物」を掲げ、単なる商品購入だけに終わらないとくみを広げようとしています。世界の様々な国や地域をご覧になっているサコさんから見て、他にはどのような国際社会への貢献の方法があると思われませんか。

サコ SDGsの17の目標は一人では達成できないので、みんなで達成できればいいと思います。先進国はSDGsを叫んでいますが、開発途上国の人たちはまだ「SDGsとは何ですか」という状態にあることが多い。このこと自体が課題ではないかと思えます。SDGsの存在とゴールを全世界で理解し、共有し、改善のために知恵を出し合うことが大きなステップではないでしょうか。

私自身、自分の国で悲しい思いをして目が覚めました。私は大学院生の時に、環境を守る建築物の勉強をしていて、マリに帰って講演会を開きました。「電気はこんなに使ってはダメだ」と話したとき、現地の人から「電気を通

ていない地域に言うな。あなたは先進国に住んでいて、余るほどの電気を使っているからそれが言えるんだ」と叱られました。一部の人たちが、「自分たちがこれ以上資源を使い続けてはまずい」というエゴで削減目標を設定する。その目標を途上国にも認めさせて、守らせるという非常におかしな流れを作ってしまったのです。

畑 結果的にそうなっているとしたら、改善しないといけませんね。

サコ 目標達成ばかりを追いかけるのではなく、SDGsを落とし込んでいくには個々の気遣いや気づきが非常に重要です。何に気づき、そこから自分の姿勢がどのように変わるかが大事なのです。

畑 日本は食品ロスが大きな問題として取り上げられています。生協はもちろん、メーカーや一人ひとりの消費者が自分ごととして考え取り組まなければならないことだと強く感じています。

変わっていくコミュニケーションの かたち、その中で変わらないもの

畑 京都生協では宅配事業の共同購入が近隣のコミュニティ形成に貢献してきたと自負しています。しかし、昨今は個人宅配への移行もあり、共同購入が減少しています。京都生協ではこれに代わるコミュニティを地域に作っていかねばいいなと感じています。サコさんが専門とする「空間人類学」の観点から考えた場合、現在の日本、京都に住む人が求めるコミュニティとはどのようなものでしょうか。

サコ 私は学生時代、大家さんの奥様にすすめられ生協で共同購入を利用していました。奥様が注文書を確認したり、商品を下宿に届けてくれたりと、細かいコミュニケーションをとっていたのです。このプロセスが、コミュニティを形成する上で一番重要です。個人単位になっているのは、時間が人と合わせにくい、買ったものを人に見られたくないなどの理由があると思います。

それでも食を通したコミュニケーションは重要で、大学

でも外国人留学生に「あなたの国の料理を作って」と言って、一緒に食べることで味や感覚の違いなどを通して互いの文化を知ることができます。一方的ではなく、「あなたのことを教えて」と言うのと、「大事にされている、関心を持たれている」と相手を感じ、友好関係が良くなるのです。

畑 一緒に食べることで距離が縮まる、ということですね。

「頼もしき隣人」をつくる コミュニケーション

畑 京都生協は職員ビジョンとして「頼もしき隣人たらん^{*1}」を掲げ、1人の人間として自立し、職員同士も「頼もしき隣人」として助け合っていきたいと考えています。そのためにはコミュニケーションが活発であるべきですが、個を大切にしながらより密なコミュニケーションをとるためには、どんなことが大切でしょうか。

サコ コミュニケーションは昔のように自然発生する可能性は低くなっています。意識的にお互いを知る機会、場を作るしかありません。大学でも1年生の時にいろいろな共同作業の機会や場を増やすことによって、自然とコミュニケーションが生まれます。

畑 ちなみに、かつては日本でも地域で子育てをしていたのですが、マリでは皆さんどのように子育てをされていますか。

サコ 子どもたちはみんなの子どもですから、悪いことをしたら他人に叱られたりもします。今の子どもは叱られるチャンスがない。大人が子どもに寄り添う姿勢を持たなくなってきたのが問題ではないかと思えます。

畑 生協が子どもに寄り添い、またお母さんの抱えるいろいろな問題を解決できるようになればと思います。京都生協では親子で参加できる「子育てひろば」を実施しています。子どもと2人きりでずっと家に閉じこもっていると大変だと聞くこともあるので、お母さん同士が会話できる場を生協が設けています。

サコ お母さん同士がコミュニケーションをとることで、問題が解決するケースもたくさんあると思います。

多数派の意識を変えることが 多様性への第1歩

畑 多様なバックグラウンドを持つ人たちが通う京都精華大学は、違いを受け入れつつも対等に機会が開かれていると思います。大学の方針として、またサコさん個人としてもこの考えに至った背景、気づきのきっかけは何でしょうか。

サコ 私が日本に来たとき、外国人として優遇された一方、制限もありました。一般社会の日本人と対等ではなかったのです。だから私は外国人という肩書きに甘えず日本社会に入っていました。日本語が分からなくても一生懸命話して、研究論文も日本語で書く。大学も対等の立場を与えてくれたことで、私は自分の可能性に気づきました。ダイバーシティ（多様性）は少数派に対して特別な条件を与えるのではなく、多数派の意識を変えることが重要です。そうすると自然と多数派・少数派という格差ではなく、「みんなで一緒に」が実現できると思います。

畑 京都精華大学が掲げている「ダイバーシティ推進宣言^{*2}」を拝見し、とても共感しました。素晴らしい言葉だと思います。

京都生協グループでは障がい者や外国人留学生、研修生の雇用を進めています。多様な人たちが働ける、また多様な働き方ができる職場環境づくりを進めていく上で、大切にすべきことがありましたらお聞かせください。

サコ 日本では、ワークシェアリングが難しい。生活のために仕事をしているのに、仕事のために生きているようになっています。そこをどう変えるかです。

畑 個人の状況を出し合って共有するような職場環境づくりが大事ですね。

お互いに認め合い、尊重し合い、そこから学び合う姿勢で社会が成り立っていけば、より良い世界、より良い社会になっていくのではないかと思います。

本日はありがとうございました。



*1 頼もしき隣人たらん

「頼もしくあるために個人として自立し、助け合いの精神を持ちましょう」という意味。初代理事長・能勢克男が呼びかけ、1964年に京都生協の前身である洛北生活協同組合を設立しました。以降、京都生協の理念として掲げられています。

*2 京都精華大学ダイバーシティ推進宣言2018（一部抜粋）

本学ではダイバーシティを「多様なバックグラウンドや属性を持つ人々が違いを受容し合い、対等に機会が開かれること」と定義し、これを推進します。（中略）誰もが多様で差異がある、という考えに立ち（中略）人間の多様性に触れる機会を学内の様々な場面で継続的に設けることで、共生の意識を醸成します。違いを理解しようとするプロセスで生まれる「価値観の変化」や「他者への想像力」こそが新しい発見や思考につながり、（学生、教員、職員をはじめとする）構成員全体の創造性を高めると考えるからです。

